

ジュリアン・グリーンにおける 告白の問題(2)

—— 『悪人』にそくしての一考察 ——

井 上 三 朗

目 次

1. はじめに
2. 1955年版のテキスト
3. 『ジャンの告白』
4. 成立・出版過程をめぐって
5. おわりに

(太字は今回掲載分¹⁾)

4. 成立・出版過程をめぐって

前章において、私たちはジャンおよびグリーンの告白行為を、宗教とのかかわりのもとでとらえた。しかしながら、『ジャンの告白』が信仰への回帰を志向して書かれているとしても、告白の相手は神だけではない。ジャンはエドウィー・ジュが読むことを想定しつつ『告白』を作成しているのだし、グリーンは『告白』をふくむ『悪人』を公けにしているのだ。ここから、告白の受け手としての他者＝読者の存在が浮かび上がってくる。しかもこの小説は完全版の刊行にいたるまでに曲折した過程を経てきているのである。グリーンはなぜ1938年、作品執筆を放棄したのだろうか。どうして55年にふたたび着手したのか。また55年版刊行に際して『ジャンの告白』を削除した理由は何なのか。これらの問いに答えることは、告白の意味を考えるうえでやはりどうしても必要であろう。以下、作品の成立・出版過程を再点検しつつ、今度は他者＝読者という視点から

告白の問題を考察してゆきたい。

まず、1938年5月の『悪人』放棄にかんしてであるが、グリーン自身は55年版への「序文」の中で二つの理由を挙げている。その一つは「宗教への強い関心」²⁾である。「実際、数年前から宗教への強い関心のために、私は世の中から、『悪人』で取り組んだ問題から、しだいに遠ざかりつつあった」²⁾と彼は述べている。おそらく『告白』完成の時点で、作品執筆の必要性・必然性がなくなったのであろう。なぜなら『告白』は神への回帰の姿勢を示すところで終わっており、第三部の筋の展開は作者の目指すのとは逆の方向に向かうことになるからだ。グリーンは第三部第一章、すなわち、ヴァスール夫人と散歩中、車に乗ったガストンをエドウィージュが目撃するところで(340)、仕事を中断している。こののち、エドウィージュはジャンとともに、地上(肉体的なもの)への執着をどうすることもできず命をおとしてしまう。38年5月の段階でこのような結末が作者のなかで明確な輪郭をとっていなかったとしても、主人公たちのドラマにこれ以上参与することは無意味であるばかりか、たましいの救済に危険にさえ思われたにちがいない。

さて、グリーンが指摘する、執筆放棄のもう一つの理由は、当時の緊迫した社会情勢である。「私たちは当時、ストライキと戦争の危機の雰囲気の中で暮らしていた。私たちが慣れ親しんできた世界はますます壊れやすいものに思われた」³⁾と彼は言い、「増大する全体の不安」⁴⁾が執筆をためらわせたのだと述べている。実際、戦争の勃発、いわば世界の崩壊を目のまへにして、同性愛といったような個人的な問題をあつかう気力がそがれることはたしかであろう。それにこうした状況にあっては、現実を凝視するのではなく、「現実世界からのがれ」⁵⁾たいという欲求が生じる。『悪人』放棄ののちの『ヴァルーナ』執筆はまさしくこの欲求の端的なあらわれなのである。

しかしながら、上に述べたような、作者じしんの説明は理解できるとはいえ、不十分な印象を与える。なぜなら、宗教への志向や当時の社会情勢とともに、もっと重要な理由が作品放棄と関係しているように思われるからだ。その理由とは『ジャンの告白』の赤裸々な内容である。この点、『告白』のなかで、作家を志望する若きジャンが『悪人』の制作をこころみ、断念するくだりは示唆に富む。すでに触れたように、ジャンはこの小説で自己の性愛の秘密を告白しようとする。だがジャンは「公衆」という名の「法廷」に自己の著作をゆだねる事態を思いうかべてたじろいでしまう(313)。告白への願いをいだきながらも、「正常と称せられる人びとの軽蔑と悪意」に敢然と立ち向う勇気を彼はもてな

い(314)。結局、ジャンは「^{スキヤングル}醜聞への不可解な、深い恐怖」(315)の念におそわれて⁶⁾、書きかけたばかりの原稿を破棄してしまうのだ。ジャンが『悪人』の制作を断念するこの過程は、38年5月の執筆放棄の事情を物語っているであろう。グリーンもまた、自己の秘密を開示するために『悪人』を作成するのであるが、『告白』は同性愛の肉体的苦悩にも言いおよんでおり、そのあらゆる内容ゆえに、作品の出版が到底不可能だと判断されたにちがいない。つまり作品公表へのためらいがないしおそれが、38年の執筆中断をひきおこした理由のひとつに、おそらくは決定的な理由になったと考えられるのである。

けれどもこののち、作品を完成・公表しなかったことにたいする大きな悔恨がグリーンの内心に宿ることになる。1944年5月の日記の中で彼は、「語らなければならなかったのに、私はだまってしまった」⁷⁾と語り、46年2月には「公けにしなかったことを非常に悔やみながら『悪人』の一部分を読み返した」⁸⁾と書いている。また、「グリーンは中断した『悪人』のことにふれて、「本を書くだけでは、作家を解放するのに充分でない。大衆がその本を知る必要がある。大衆がわかる必要があるのだ」⁹⁾と述べ、作品公表への並々ならぬ意欲を示している。さらに『ヴァルーナ』では、作者の代弁者とみなされる語り手ジャンヌをとおして、「最良の友にさえ打ち明ける勇気のないことがらを、無数の見知らぬ人たちに伝えたいという、あの奇妙な願い」¹⁰⁾のことが語られている。秘められた真相告白の欲求は『悪人』中絶以後、いっそう切実になったのだといえよう。55年版刊行に先立って発表された『モイラ』や劇作『南部』はいずれも同性愛の状況を設定しており¹¹⁾、告白の欲求が制作の誘因となったことはまぎれもない。見方によれば、それらの作品は未発表の『悪人』の目的を果たすために書かれたとさえ考えられるのである。

このように、グリーンは『モイラ』『南部』を経て、ようやく『悪人』の完成・発表にまでたどりつくのであるが、しかし55年版からは『ジャンの告白』は割愛された。作中、『告白』はポーク夫人によって隠匿され、エドウィージェが読むことができないように、55年版の読者もまた目にはななかった。つまりそれは幻の告白となったのである。

ロベール・ド・サン＝ジャンは『告白』が削除された理由として、一人称による表現形式を挙げている。すなわち「その直接的な語り方が、(エドウィージェをとおしてドラマが描かれる)本の第一部・最終部とはほとんど折り合えなかった」¹²⁾がゆえに削られたのだと説明している。しかし語り方の不統一は『悪人』だけにかぎらない。『ヴァルーナ』や『他者』でも一人称と三人称の両方の表現

形式がとりいれられており、それは作家グリーンの常套手段とさえいえる。問題は、文体の変化が内容的な混乱をきたすかどうかであろう。だが『告白』の挿入によって小説がまとまりを欠くとは思われない。『告白』にはガストンのほか、ヴァスール氏やユルリックも登場し、ことなる視座からとらえられた人物像が提出されることで、作品世界に奥行きと広がりを与えられる。同様の効果は、ヴァスール氏の館でのパーティーのこととか、ジャンが警官に追われる一件のような、作品第一部のエピソードが『告白』においてふたたび取りあげられるという点からも生じている。また、第一部・第三部がエドウィージェの不可能な愛の物語を中心に描いているとしても、同時にジャンの〈悪人〉のドラマを内包しており、このドラマの全容は『告白』を読むことによってはじめて理解されるのだ。『悪人』は1934年刊行の『幻を追う人』と同一の構造を有している。『幻を追う人』でも第二部に主人公の一人マニュエルが作成した物語『あり得たかもしれないこと』が入れられることで、彼の内心のドラマが解き明かされる仕組みになっている¹³⁾。そして『あり得たかもしれないこと』と同じように、『ジャンの告白』は小説の中の小説として固有の小宇宙を形成しながらも、作品総体がかたち作る大宇宙を照らす光源体の役割をはたしているのである。したがって、『告白』は『悪人』から切り離すことはできない。逆に『告白』の削除こそ、首尾一貫性の欠如をもたらす結果となるのである。

また、ジャック・ブチは『告白』削除の原因を、『悪人』と『南部』との主題の重複にもとめている。たしかにこの二つの作品には類似した状況が見いだされる。『南部』では、宿命的な出会いによって同性愛の情熱にとりつかれるイアンと、このイアンに報われぬ愛情をささげるレジーナが登場するが、この二人は『悪人』のジャンとエドウィージェに対応する人物と考えられる。というのも、レジーナは、まったく希望をもたない愛をはぐくんでいるという点でエドウィージェを思い起こさせるし、イアンはジャンと同様、情熱の苦悩の果てに命をおとすからだ。すなわち孤独のなかで不毛な情熱をいだきつづけることに絶望したイアンは、故意に愛する相手の男エリックを侮辱し、決闘に誘い出し、決闘に際しては無抵抗のまま相手の剣の一撃にたおれるのである。

ところで、『南部』においてイアンが同性愛の秘密を告白しようとする場面が見られる。自分を敬愛する少年ジミーに、相手の理解を得ることなく、一方的に愛しつづけなければならぬ同性愛者の苦しみを打ち明けるところ（第二部第四景）とか、エリックを決闘にかり立てるまえに、曖昧なことばで内心の思いを伝えようとする場面、「迷彩をほどこした告白」¹⁴⁾と作者が呼ぶ場面（第三幕

第一景)である。それゆえ、『南部』は『悪人』の意図を一定程度実現していると言える。ジャック・プチはこの点を踏まえてジャンの告白の削除を説明する。「イアンがすべてを語ったがゆえに、彼〔ジャン〕の告白が不要になった」¹⁵⁾と断定するのである。そして55年版「序文」の中の、「『南部』において私は男性の主人公の目をとおして主題を見ようとつとめた。『悪人』では、不可能な愛の悲劇を女性が納得しうるようなかたちで理解したいと思った」¹⁶⁾という文章を引用しつつ、『悪人』では、『南部』の繰り返しを避けるために、ジャンにかわってエドウィー・ジュが前面に押しだされたのだと、プチは考えるのである。

しかしながら、ジャック・プチのこの見解にはひとつの疑問がのこる。『南部』のイアンがほんとうにジャンの告白を不必要にするほど「すべて」のことを語っているのか、という疑問である。答えは否だ。イアンの告白は同性愛の苦悩にかんするものであるとしても、感情次元にとどまっている。これにたいしてジャンの告白は肉欲の苦しみをも問題にしており、イアンの告白の内容の範囲を明らかに越えているのだ。しかもグリーンは55年版「序文」で、中断した『悪人』を完成した決定的な理由として、「現代世界における、肉体生活のもっとも悲劇的な局面のひとつに、真面目な読者の注意を向けること」¹⁷⁾を挙げており、この目的を達成するためにも、『告白』は必要不可欠なものなのである。

とすれば、『告白』が削除された原因は当然、ほかのところにあると考えなければならない。それはやはり、1938年の『悪人』中絶の際と同様、『告白』のあらわな内容と関係しているのではないだろうか。55年の時点でもこれを公けにすることは大いにはばかられたにちがいない¹⁸⁾。ためらいやおそれを克服して『告白』を公表しうるためにはもっと多くの時間が必要だったということなのであろう。

このことは、『告白』と類似した内容を有する『青春時代』が着手から完成・出版までに長い歳月を要したことと合わせて考えるべきである。すなわちグリーンは1955年版『悪人』の発表のあと、同じく同性愛者の苦悩を書きこんだ小説『人みな夜にあって』¹⁹⁾を経て、1959年11月ごろから正真正銘の自伝の制作にとりかかった。そして『夜明け前の出発』と『開かれた千の道』を62年7月までに完成し、『遙かな土地』を63年4月から10月までに書きおえ、それぞれ63年、64年、66年というように矢継ぎばやに公表した。しかし『青春時代』だけは、1966年2月に着手されながらも、ただちに中断され、小説『他者』(71)の執筆をあいだにはさんで、72年に再開、74年刊行といった具合に、上梓にいたるまでに予想外の時間をついやしたのである。この理由が『青春時代』の赤

裸々な内容とかかわっていることは疑いをいれない。『人みな夜にあって』や最初の自伝三作でも、同性愛にかんする秘密と苦悩が表白されているとはいえ、『青春時代』ほどあからさまな内容ではなかった。『告白』と同様、『青春時代』もまた、罪の体験をふくむ肉欲の懊悩の告白を主題としており、このことが執筆・刊行の遅れをもたらしたのである。げんにグリーンは1972年6月、中断した『青春時代』の原稿を読み返して、「この話を続け、公けにすることを私は時折考えるが、なかなか決断がつかない」²⁰⁾と書きしるしている。『青春時代』公表をめぐってのこうした逡巡は55年版『悪人』からの『告白』削除を説明するにちがいない。そして『告白』をふくむ完全版の刊行が1973年、すなわち『青春時代』発表の前年になされていることは偶然でないように思われる。つまり『告白』の公表は『青春時代』刊行の前段階としてあると同時に、『青春時代』の刊行を決意した時点ではじめて可能になったのだと言えるのではないだろうか。

それでは、なにゆえにグリーンは他者＝読者のまえに同性愛の性向にまつわる秘密を提示しようとするのであろうか。このことを解明するためには、もう一度作品に立ち戻って考えなければならない。私たちは前章において、ジャンを告白にかり立てるものとして、罪意識があることを指摘した。だがこれとともに彼の孤独意識にも注意を払う必要があるだろう。ジャンの孤独感はもちろん、ガストンへの不可能な愛の苦悩に起因するだけではない。何よりもまず、特異な性向ゆえに「社会の除け者」とされ、「例外」として生きているという自覚(315)に、それは立脚している。同性愛の性向をもつことじたいに根ざした、ジャンの孤独感は、「出来そこない」(monstre)という自己規定からも読みとれるし(321)、「みんなと同じでないことを悔やむ抜きがたい悔恨の念」(315)や、あるいはまた、「ギリシアは遠いのだ、ギリシアとかの地の人びとは！」(316)といった悲嘆、古代世界へのあこがれからも認めることができる。そしてこうした孤独意識との関連で、ジャンのなかには、「できることなら彼は<他者>と呼ばれる、あの無数の家族にまじり合い、そのなかに身をひそめたいと思う」(202)と書かれているように、自己と他者とのあいだに立ちはだかる障壁を取りはらい、他者と融合したいという痛切な願いが存在するのだ。作品冒頭で語られたこの願いは告白ではなく沈黙のほうへジャンをいざなう。だがこのような願いは、自己の性的傾向について口をとざし、秘密を背負って「偽善者」(315)のように生きるかぎり実現されない。他者との断絶はますます苛烈に意識され、のがれようのない孤独地獄におちいることになるからだ。自己を他者からへだ

てる障壁を除去するためには、沈黙をやぶり、＜悪人＞としてのあるがままの姿を他者に開示する以外に方法はない。＜告白＞とは、孤独感からの解放への願いにささえられた、他者との交流を目指す行為であるともいえるのではないだろうか。

もっとも、ジャンにおいて、告白の衝動は、自己を断罪し、自己に沈黙を強いる社会にたいする「反抗」の動きとしてあらわれる(202)。そして事実、ジャンの告白の底流には、「いまでは美德を擁護する人びとの値打ちがどれほどものかわかっている。たいてい、姦通をおかす大群衆のなかから集められた連中だ」(309)という言い方からうかがえるように、世の同性愛者を＜悪人＞として指弾する人びとへの抗議の感情が横たわっている。グリーン自身もまた、ジャンが「犠牲者」であり、作品の表題には「敢えて彼を裁く人びと」にたいする「辛辣な皮肉」がこめられていることを認めている²¹⁾。つまり『告白』さらに『悪人』は、一面において抗議の書としての価値を有しているのである。

けれども、こうした反抗や抗議の気持ちは究極において他者の理解をもとめる欲求に包含されるものであろう。エドウィージェュに＜悪人＞としての秘密を打ち明けようとするとき、ジャンが他者のもとに到達したいという願い、他者との交わりを希求するところに揺り動かされていることは否定できない。では、どうしてジャンは告白の受け手としてエドウィージェュをえらぶのであろうか。もちろん、エドウィージェュがジャンと同じくガストンに執着しているからである。あるいはまた、エドウィージェュへの夜の訪問をかえりみて、「あのときぼくは誰か純粋な人と、君のような人と話をしたかった。(…)君には、ぼくのような人間に純真さがどんな力をおよぼすのか、よくわからないのだ」(355)と語っているように、エドウィージェュの純真さないし無垢さが、失われたものへの郷愁として、ジャンを惹きつけるからでもある。しかし最大の理由はエドウィージェュの孤独性にあるのではないだろうか。エドウィージェュもまた、不可能な愛を生きることで、癒やしがたい孤独感・断絶感にさいなまれているのだ。「ぼくは君が不幸だと知っていた。そのことがぼくらをたがいに近づけたのだ」(333)と述べられているように、エドウィージェュのこうした不幸が、自己の運命との類似性を見させ、ジャンを彼女に接近させているのである。この点、ジャンにとって、＜告白＞とは孤独な者との連帯をもとめる行為であるとも考えることができよう。

以上に述べたことは、作者グリーンにもあてはまるように思われる。『青春時代』を執筆中、「私が心がけていることのなかでもっとも不変的なものの一つは、

ごまかさないといいことだ。私は神のもとに行きたいが、しかし人びとに嘘をつきたくない」²²⁾と彼は書いている。この言い方からは、隠された自己の真実のすがたを伝えることで、他者のもとに到達しようとする意欲が読みとれる。そしてまさしくこうした意欲が、『悪人』の作成をうながし、長い躊躇ののちの完全版の刊行に踏みきらせる、決定的な誘因となったのではないだろうか。ジャンの孤独意識はグリーンのものだ。同性愛の性向ゆえに他者との断絶のなかで生きなければならなかったグリーンにとって、〈告白〉とは実生活では不可能な、他者とのまじわりを達成するための手段なのではないだろうか。

また、グリーンは1939年の日記のなかで、「私は孤独な人のために著作したいと思う」²³⁾と書いている。このように、グリーンが文学の営みの根源には、孤独者との連帯を念願する姿勢があるのだ。『悪人』において、この姿勢はジャンやエドウィージュだけではなく、フェリシー、ユルリック、ヴァスール夫妻といった多様な人物たちの孤独な運命が共感をこめて描かれているという点から認めることができよう。そして〈告白〉もまた、孤独者との連帯を志向する一環としてあることは言うまでもない。「私たちの中のいかなる者も一人ではない」²⁴⁾とグリーンは言い、「各個人は彼ひとりだけで人類全体なのだ」²⁵⁾とも述べている。おそらくグリーンは、自らの苦悩が特異な性向とかがわっているとしても、普遍的な面を合わせもつことを信じているのであろう。実際、『告白』で表白される孤独の苦しみ、さらに孤独のなかでの肉体的苦悩は、形をかえて読者の多くが共有しうるものにちがいない。それゆえ、グリーンにおいて、〈告白〉とは他者との交わりを目指す行為であると同時に、孤独者との連帯をもとめる営みであるともいえるのである。

5. お わ り に

以上、私たちは『悪人』を読解しつつ、あわせてその複雑な成立・出版事情の理由を解き明かしながら、グリーンにおける告白の問題を考察してきた。ここであきらかになったことは、〈告白〉とは同性愛の秘密の表白であり、罪意識とのかかわりで神への回帰を志向する行為であり、そしてさらには、孤独意識との関連で、他者との交わりとともに孤独者との連帯を目指す行為であるという点である。つまり〈告白〉とは、はじめに指摘したように、同性愛の秘密の開示によって、神および孤独な他者のもとへの到達を志向する営みだということなのである。

この考察は『悪人』の検討にそくしてなされたものであり、もちろん『夜明け前の出発』から『青春時代』にいたる自伝作成の意味を全面的に究明しているとはいいがたい。けれども、上に述べたことは、自伝とともに、『もうひとつの眠り』『モイラ』『南部』『人みな夜にあって』といった、もっとも自伝的といわれる作品のなかで、グリーンが直接あるいは間接的にこころみている〈告白〉の、少なくとも基本的な、しかし本質的な意味を明かしていると思われる。『悪人』はまさしくグリーンにおける告白の問題を解く鍵を秘めた小説なのである。

とはいえ、『悪人』は告白の挫折を跡づける物語である。なぜならジャンは自己の真実を語ったとしても、エドウィージェにそれを伝えることができないまま世を去り、作者グリーンは長らく完全版を刊行するまでにはいたらなかったのだから。1938年の執筆放棄、55年の『告白』削除は、作者じしんの告白のこころみの挫折を示すものにほかならない。しかしこの挫折によって、告白の欲求はいっそう深まったのであろう。『モイラ』『南部』『人みな夜にあって』といった後期の作品の展開は、もしこの挫折がなければ、あり得なかったとはいえないまでも、少なくとも違ったかたちをとっていたことはたしかであろう。さらに、完全版『悪人』の刊行が『青春時代』の公表の前段階としてあるとしても、それ以前の告白の挫折が自伝執筆への決定的な道筋をつくったと考えるのは間違っているだろうか²⁶⁾。

もともと、『悪人』は中期に属する作品である。たしかに、先にもふれたように、『悪人』は『幻を追う人』と同じ構造を有しているし、裁縫女のフェリシーはマネキン人形ブランシヨネにたいする異様な接し方と、ふだんの臆病さや従順さに反した、一連の突飛な反抗行為とによって、中期の作に特有の、幻想的な雰囲気をかもし出している。また『悪人』の人物たちは、初期から中期の作中人物たちとの類縁性をたもっている。すでに述べたように、ジャンは『もうひとつの眠り』のドウニの進化、成長した人物である。エドウィージェは『アドリエヌ・ムジュラ』(1927)のヒロインや『漂流物』(33)のエリアーヌの延長上の人物であり、不可能な愛のドラマをいっそう悲劇的に体現している。サディスムへの傾斜を示すユルリックとヴァスール夫人は、『レヴィアタン』(1929)のグロジョルジュ夫人、『幻を追う人』のプラス夫人のような愛されない女性たちと同類である。ヴァスール氏はその善良さによって『真夜中』のルラ氏あるいはアニエル氏を思わせる。死を象徴するポーク夫人は『幻を追う人』のジョルジュ夫人の発展した姿である。肉体美によって他者を魅惑するガスト

ンは『もうひとつの眠り』のクロード、『真夜中』のセルジュを想起させる。entremetteuseの役割を果たし、欲望の化身である骨董屋の女アルレットは、『アドリエヌ・ムジュラ』のルグラ夫人と姉妹であるかのようだ。このように『悪人』は人物像という点において初期から中期の作品とのつながりを有しており、その構造および雰囲気を考えあわせると、実質的に中期の特徴をそなえた小説であることがわかる。したがって、『もうひとつの眠り』に後続する『悪人』は、中期から後期への転換をもたらした幻の作品だといえるのである。

私たちは『悪人』を手がかりに告白の問題を考察した。しかしこの問題はやはり、グリーンが直接的な告白をくわだてる自伝にそくしてあらためて検討すべきであろう。今後の課題としたい。

[註]

グリーンのテキストは、Julien Green: *Œuvres complètes textes établis, présentés et annotés par Jacques Petit*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t. I, 1972; t. II, 1973; t. III, 1973; t. IV, 1975; t. V, 1977を使用した。*Le Malfaiteur* はt. III, pp. 196-409に収録されている。また、この作品に関しては、同時に1955年版に依拠した限定単行本(Plon, 1956)を参照した。*Le Malfaiteur*からの引用文の頁数は本文中()内に記し、これ以外の作品からの引用の出典はこの[註]で明示する。頁数の前のローマ数字は巻数をあらわす。日記からの引用は合わせて年代と日付をしめす。なお、上の全集版には、*La Bouteille à la mer (Journal, X)*は取められていないため、このテキストからの引用のみ、Plon版単行本(1976)に拠った。

- 1) 目次の1. 2. 3. に該当する部分は、『ジュリアン・グリーンにおける告白の問題(1)——『悪人』にそくしての一考察——』、『山口大学文学会志』第33巻, 1982, pp. 99-113を参照。
- 2) 3) 4) 1955年版*Le Malfaiteur*への「序文」, III, p. 1596.
- 5) *Ibid.*, p. 1597.
- 6) 作中、「醜聞」への危惧はPauque夫人をとおしても表明されている。Jeanの行状を話題にしなが、夫人はHedwigeに「わたしはスキャンダルが大きらいなの」(364)と言っている。『告白』を隠匿し、JeanがナポリでHedwigeに宛てて書いた手紙を破り捨てるPauque夫人は、作品公表をめぐっての、作者の内心の動きを反映しているかもしれない。
- 7) *L'Œil de L'Ouragan, Journal IV*, 27 mai 1944, IV, p. 776.
- 8) *Le Revenant, Journal V*, 8 février 1946, IV, p. 902.
- 9) *L'Œil de L'Ouragan*, 22 septembre 1944, p. 808.
- 10) *Varouana. II*, p. 788.
- 11) *Môira*において同性愛は、主人公Josephに空しいあこがれをつのらせ、自殺するSimonのドラマ、および、執着と反撥の入りまじった感情をたがいにいだきあうJosephとPraileau

- とのあいまいな関係をとおして表現されている。*Sud*に関しては後述する。
- 12) Robert de Saint-Jean: *Julien Green par lui-même*, Seuil, 1967, p. 116.
 - 13) *Le Visionnaire* の中心人物もまた二人(ManuelとMarie-Thérèse)であり、このうちの一人の内心のドラマが*Ce qui aurait pu être*によって明らかにされるわけである。
 - 14) *Le Miroir intérieur, Journal VI*, 24 février 1952, IV, p. 1266.
 - 15) Jacques Petit: *Julien Green, «l'homme qui venait d'ailleurs»*, Desclée De Brouwer, 1969, p. 189.
 - 16) 17) 1955年版*Le Malfaiteur*への「序文」, p. 1597.
 - 18) この点に関して、1955年版*Le Malfaiteur*が、大衆の注意をひきやすく、しかも廉価な単行本ではなく、限定版の全集「小説・IV」の一部として発表されたこと、また、この版に依拠して翌1956年に刊行された単行本も同様に限定版であったこと、を思いあわせてもよい。これらの事実から、『告白』をはぶいた作品の公表にさえ、ためらいの姿勢のあることが察知される。
 - 19) *Chaque homme dans sa nuit*において、同性愛の苦悩は、主人公Wilfredに執着するAngusおよびMaxをつうじて語られる。
 - 20) *La Bouteille à la mer, Journal X*, 17 juin 1972, p. 34.
 - 21) グリーンは1956年の日記のなかで、『悪人』について次のように書いている、「私の頭の中では、ジャンはエドウィージュと同様、犠牲者だ。無垢さには欠けるが、しかしそれでも犠牲者であることに変わりはない。敢えて彼を裁く人びとの目から見れば、彼は悪人である。それじゃ、表題は皮肉なんだ、と人は言うかもしれない。なるほどそのとおりだ。だが辛辣な皮肉がこもっているのである」(*Le Bel Aujourd'hui, Journal VII*, 26 mai 1956, V, p. 29)。
 - 22) *La Bouteille à la mer*, 16 juillet 1972, p.44.
 - 23) *Derniers beaux jours, Journal II*, sans date 1939, IV, p.516.
 - 24) *La Bouteille à la mer*, 19 février 1973, p.113. なお、この考えは、自伝の問題についてふれ、「語られた私の生活が無数の人びとの生活と、なんらかの面で類似しているものでなければ、面白味はないだろう」と述べたあとで、表明されたものである。
 - 25) *Derniers beaux jours*, 9 février 1937, p. 424.
 - 26) Jacques Petitによれば、ジャンの告白は、後年自伝で語ることになる内容を要約しているがゆえに、もし発表していたら、「おそらく自伝の作成を不可能にしていたらろう」と、グリーンは語ったという(*op. cit.*, p. 177)。

参 考 文 献

- グリーンに関する研究書・論考は数多くあるが、小論作成に際して、本文および〔註〕で言及したものほかに、下記の文献を主として参照した。(◎印は研究書、○印は論考)。
- ◎ André Blanchet: *La Littérature et le spirituel II, «La Nuit de feu»*, Aubier, 1960.
 - ◎ Marcel Lobet: *Ecrivains en aveu, Essai sur la confession littéraire*, Editions Brepols,

Bruxelles, 1962.

- ◎ Jean Sémolué: *Julien Green ou l'obsession du mal*, Editions du Centurion, 1964.
- ◎ Dr. J. Uijterwaal: *Julien Green, personnalité et création romanesque*, Van Gorcum & Comp. N. V., Assen, Pays-Bas, 1968.
- ◎ Jacques Petit: *Julien Green*, coll. 《Les écrivains devant Dieu》, Desclée De Brouwer, 1972.
- ◎ Antonio Mor: *Julien Green, témoin de l'invisible*, traduit de l'italien par Hélène Pasquier, Plon, 1973.
- Gaëtan Picon: *Les Romanciers contre le roman*, Mercure de France I-VII-1956, pp. 494-500.
- ◎ 佐分純一『ジュリヤン・グリーン』, 慶應義塾大学法学研究叢書別冊, 1964.
- 佐分純一: 『告白の作家の資質』, 慶應義塾大学「教養論叢」第29号, 1971.
- 佐分純一: 『Julien Green の小説《Epaves》をめぐって』, 慶應義塾大学「教養論叢」第34号, 1972.
- 佐分純一: 『Julien Greenの作中人物 —— その精神構造を中心として ——』, 慶應義塾大学「教養論叢」第38号, 1974.
- 佐分純一: 『ジュリヤン・グリーン作品における告白の表現』, 慶應義塾大学「教養論叢」第45号, 1977.
- 佐分純一: 『ジュリヤン・グリーンの『自伝』 —— その成立過程をめぐって ——』, 慶應義塾大学「教養論叢」第52号, 1979.

〔付記〕 この小論は1981年度科学研究費補助金研究課題「文学における告白の問題 —— ジュリアン・グリーンの文学を中心として ——」の研究成果の一部をなすものである。